

『万葉集』に歌われたカメ —藤原宮役民作歌の神しき亀について—

後藤康人

133-0056 東京都江戸川区南小岩5-21-11 えどがわ生物懇話会

Waka poem in "Manyoshu" in which turtle appears: About an extraordinary turtle in "Waka poem composed by a manual laborer sent to build the Fujiwara Palace".

By Yasuhito GOTO

EDOGAWA Social Meeting on Biology, 21-11, Minamikojiwa 5-chome, Edogawa, Tokyo, 133-0056, JAPAN

はじめに

カメ(亀)は我われの生活のなかでごく身近な存在である。公園や寺社の池では(人為による移動、遺棄が由来であろう)ミシシippアカミガメやクサガメが臆することなく餌をねだって近寄ってくるため、子ども連れの家族にはたいへん受けが良い。また文化面でもキャラクター商品や亀甲紋様の雑貨等に姿形を変えて暮らしの一部に溶け込んでいる。

そのいっぽうでカメは、ある種の神秘性をまとい続ける存在である。平成や令和における新天皇の即位で亀ト(ウミガメの甲羅を用いた占い)が行われたことは記憶に新しい(例えば産経新聞, 2019)。では、このような日本人とカメとの関係性は、いつから、どのような経緯をたどって、築き上げられたものなのだろうか。その歴史を探ることを目的として、本稿では日本最古の和歌集である『万葉集』で歌われたカメについて述べてみたい。

生きものの好きの視点からの『万葉集』

『万葉集』は全20巻に約4500首の歌が収められた日本最古の和歌集として知られる。冒頭1番歌には雄略天皇(第21代天皇で5世紀後半の天皇)の御製歌が、そして最終4516番歌には大伴家持(718-785)作歌による天平宝字3(759)年正月一日の歌が配置されている。このことから歌集としての編纂は8世紀半ばを過ぎてから行われたと推定されるが、『万葉集』が「いつできたかという問題であるが、実は、これははっきりとはわからない」(中

西, 1978)のが現状である。

生きものの好きの視点から見たとき、『万葉集』には数多くの動植物が歌われていることに驚かされる。例えば動物については田中(1998)が873首(77種)を、植物については服部他(2010)が1650首(維管束植物種数145種)を確認している。特に万葉歌人がトリ(鳥)を好んで歌ったことは広く知られていて、歌人であり日本野鳥の会の創立者でもある中西悟堂が『万葉集』からトリおよびトリに関係する名詞を拾い上げたところ、その数は589件にも上った(中西, 1953)。このことは我が国に根付く愛鳥精神が万葉の時代にまで遡り得ることを示唆している。

ところが、カメに関連する歌は意外に思えるほど少ない。例えば浦島伝説をモチーフとした高橋虫麻呂の「詠水江浦嶋子一首」(巻9-1740)には「亀」という文字は使用されていない(カメは登場しない)。車持娘子の長歌(巻16-3811)と山上憶良の「沈痾自哀文」には「亀」の文字が使われているものの、それが指し示しているのは占いとしての亀トである。つまりそれらを除くと、カメが歌われているのはわずか「藤原宮役民作歌」(巻1-50)一首のみとなる。

藤原宮役民作歌と図負へる神しき亀

上述のとおり、実質的に『万葉集』でカメが登場する歌は「藤原宮役民作歌」だけといってよい。題名は藤原宮(現・奈良県橿原市)造営に動員された役民が作った歌という意味だが、歌才と教養が必要と

される長歌であり、労役に就いた当時の一般民衆の作とは考え難いという指摘がなされている(例えば阿蘇, 1977)。歌の内容が朝廷賛歌であることから宮廷歌人、なかでも柿本人麻呂による作歌とする説(例えば折口, 1929)があるものの、現在においても作者の特定には至っていない。藤原宮造営期間は持統天皇4(690)年から同8(694)年にかけてのことなので作歌年代もその時期と推定される。

以下に高木他(1957)による読み下しを転載してみよう(歌は旧字体のまま、ルビもそのまま転載した。下線は筆者が加えたものである)。

藤原宮の役民の作る歌

やすみしし^{おほきみ}わご大君^{あらたへ}高照らす日の皇子^{あらたへ}荒栲の
藤原がうへに^を食^{くに}す國^めを見^みし給^みはむと都宮^みは高
知らさむと^{かむ}神^{あめつち}ながら思^{あめつち}ほすなべに天地^{あめつち}も寄^{あめつち}りて
あれこそ^{いはばし}石^{あふみ}走る^{ころもで}淡海^{たなかみ}の國^{やま}の衣^ひ手^{つまで}の^や田^そ上^{うち}山^{がは}の^は眞
木^ひさく^{つまで}檜^ひの^{つまで}婦^そ手^そを^そもの^その^そふ^その^そ八十^そ氏^そ河^そに^そ玉^そ藻^そな
す^そ浮^そか^そべ^そ流^そせ^それ^そ其^そを取^そると^そさ^そわ^そく^そ御^そ民^そも^そ家^そ忘^それ
身^そも^そた^そな^そ知^そらず^そ鴨^そじ^そもの^そ水^そに^そ浮^そき^そあ^そて^そわ^そが^そ作^そる
日^その^そ御^そ門^そに^そ知^そら^そぬ^そ國^そ寄^そし^そ巨^そ勢^そ道^そより^そわ^そが^そ國^そは
常^そ世^そにな^そら^そむ^そ圖^そ負^そへ^そる^そ神^そし^そき^そ龜^そも^そ新^そ代^そと^そ泉^その^そ河^そ
に^そ持^そち^そ越^そせる^そ眞^そ木^その^そ婦^そ手^そを^そ百^そ足^そら^そず^そ筏^そに^そ作^そり
の^そほ^そす^そら^そむ^そ勤^そは^そく^そ見^それ^そば^そ神^そな^そが^そら^そな^そら^そし

後半部に「わが国が永久不変の国になるという不思議な図を負った亀も新時代だと出てくる」(高木他, 1957)と歌われ、多くの研究者が「図負へる神しき亀」について検討を加えてきた。「神(あや)しき」は“不思議な”あるいは“靈妙な”といった意であり、現代の我われが思い浮かべがちな“神の遣い”や“神の如き”などといった語感ではないこと

に留意されたい。ほかに「神(くす)しき」とも訓じられる(例えば佐竹他, 1999)。

祥瑞思想と神亀イメージの伝来

かつて白亀(白いカメ)が発見されると祥瑞(しょうずい)として朝廷に献上された—という話を知る人は少なくないだろう。祥瑞とは、めでたい兆(きざし)であり、珍しい山川草木鳥獣の出現をいう。古代中国・前漢の董仲舒は天人相関説を唱えて、王者の政治が天の意に叶うかどうかは祥瑞や災異の出現によって知ることができるとした(武内, 1957)。中国の律令制を手本とする古代日本の朝廷は、この祥瑞思想を取り入れ、皇権の確立や政治に応用した(例えば東野, 1969)。祥瑞の出現は善政が敷かれていることを世に示す、いわば「政治がよく行われているかどうかのバロメーター」(安居, 1988)だった。なかでも特に「神亀」は、元号として用いられたほか(神亀年間: 724-729)、『延喜式』(平安時代中期の法典)で「大瑞」に位置づけられるほど尊ばれた存在だった(正宗, 1928)。「藤原宮役民作歌」は、年代的に、それらに先んじるものである。小島他(1994)は「図負へる神しき亀」について、『尚書』(洪範)の「洪範九疇」孔安国伝に「神亀文ヲ負ヒテ出ズ」とあり、その文は天子受命の兆の河図であると指摘している。緯書(古代中国で流行した神秘や預言の書)として知られる河図洛書の亀書図のカメの背には神秘的な紋様が顕れていたという(図1)。

神しき亀は出現したのか

「図負へる神しき亀」の出現が事実だったのかどうかは、研究者のなかでも意見が分かれている。中西(1978)は「祥瑞思想による粉飾」とするが、佐竹他(1999)は「霊亀出現」と見做す。『日本書紀』では藤原宮造営期間中に特異なカメが出現したという記事は確認できないが、その点について阿蘇(1977)は7世紀末にはまだ祥瑞に関する知



図1. 亀書図(来・張, 2004).

識が特殊で扱いが一般化されていなかったことを指摘している。

筆者は「泉の河」という語に着目した。現在の木津川である。藤原宮造営の時代には木材を運搬するための水運上重要な河川だった(例えば木下, 2003)。現在でも豊かな自然が残る木津川では、平成23(2011)年に全長38.5cm, 体重7.3kgのスッポンが捕獲された(図2)。藤原宮造営の頃にもそのような大型個体が見つかることがあったのではないか。おそらく体表に何らかの紋様を有した“異形のカメ”の姿に、当時の人びとは畏怖の念を感じたことだろう。

おわりに

日本最古の和歌集である『万葉集』において、生きものとしてのカメが歌われているのは、実質的に「藤原宮役民作歌」だけである。7世紀末に歌われたカメは、中国の思想や文化、政治に通じた作歌者による「図負へる神しき亀」であり、当時の国内ではまだ馴染みの薄い祥瑞思想を仮託されたカメだった。そこには現代のようなヒトとカメとの近い関係性を見出すことはできないが、ごく稀な特徴を有するカメに対する神聖視は顕在化しつつあったと考えられる。

城陽市の木津川でこのほど、在来種の公式記録として日本最大のスッポンが捕獲されました。甲羅(こうら)の全長38.5センチ、体重7.3キロ。日本爬(は)虫両生類学会会員の中川宗孝さん(58)＝同市富野在住＝が捕獲したもので、14日から神戸市立須磨海浜水族園(亀崎直樹園長)で展示されています。2011/05/14



京都民報Web
https://www.kyoto-minpo.net/ 2011・May・14

木津川で日本最大のスッポン発見 | 京都民報Web

図2. 木津川で日本最大のスッポン発見(京都民報web, 2011)

続く8世紀前半には、和銅5(712)年に『古事記』が、養老4(720)年に『日本書紀』が、相次いで完成する。自然や感情を表現した和歌ではなく、歴史を叙述した書物のなかにカメの記事が複数確認できるのだが、それらについては稿を改めて述べたいと思う。

謝辞

日本大学大学院総合社会情報研究科野口恵子教授に粗稿を読んでいただきご助言をいただいた。御礼申し上げます。

引用文献

- 阿蘇瑞枝. 1977. 藤原宮役民の歌. p.200-212.
伊藤博・稲岡耕二(編) 万葉集を学ぶ 第1集. 有斐閣 東京.
服部保・南山典子・小川靖彦. 2010. 万葉集の植生学的研究. 植生学会誌 (27) 2:45-61.
木下正史. 2003. 藤原京 よみがえる日本最初の都城. 中央公論新社 東京. 305p.
小島憲之・木下正俊・東野治之. 1994. 新編 日本古典文学全集6 万葉集(1). 小学館 東京. 506p.
京都民報web. 2011 (2023年9月27日確認). 木津川で日本最大のスッポン発見 2011年5月14日付. (オンライン) 入手先<<https://www.kyoto-minpo.net/>>
来知徳(撰)・張万彬(校). 2004. 龟书图. p.524. 九州易学丛刊 周易集注 易经来注图解 下. 九州出版社 北京.

- 正宗敦夫(編). 1928. 巻21 治部省 祥瑞. p.127-129. 延喜式 第4. 日本古典全集刊行会, 東京.
- 中西悟堂. 1953. 萬葉集の動物(二) 鳥 特に集中難解の鳥について. p.99-144. 万葉集大成 第8巻(民俗篇). 平凡社 東京.
- 中西進. 1978. 万葉集 全訳注原文付(一). 講談社 東京. 426p.
- 折口信夫. 1929. 万葉集のなり立ち. p.471-488. 古代研究 第二部 国文学篇. 大岡山書店 東京.
- 産経新聞. 2019(2023年9月27日確認). 大嘗祭の斎田は栃木県と京都府 占い「亀ト」で決定 2019年5月13日付. (オンライン) 入手先 <<https://www.sankei.com/article/20190513-HSXESR32DNOIVM4UIV5BZDFEMU/>>
- 佐竹昭広・山田英雄・大谷雅夫他(校注). 1999. 新日本古典文学大系1 萬葉集 一. 岩波書店 東京. 570p.
- 高木市之助・五味智英・大野晋(校注). 1957. 日本古典文学大系4 万葉集 一. 岩波書店 東京. 374p.
- 武内義雄. 1957. 中国思想史. 岩波書店 東京. 340p.
- 田中瑞穂. 1998. 万葉の動物考. 岡山県自然保護センター研究報告 (6): 29-41.
- 東野治之. 1969. 飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想. 日本歴史 (259): 144-164.
- 安居香山. 1988. 緯書と中国の神秘思想. 平川出版社 東京. 299p.

日本において淡水ガメはどう報道されてきたか？ —新聞記事の計量テキスト分析から探る

西澤秀明

606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学大学院情報学研究科

How has freshwater turtles been publicized in Japan?—Examination through a quantitative text analysis of newspaper articles.

By Hideaki NISHIZAWA

Graduate School of Informatics, Kyoto University, Yoshida Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto, 606-8501, JAPAN

はじめに

日本における淡水性カメ類の分布, 行動, 生態に関する研究は, この十数年で大きく進展し(谷口他, 2023), ニホンインガメ *Mauremys japonica* が「準絶滅危惧」に指定されるに至っている(竹中, 2014; Asian Turtle Trade Working Group, 2000). また, 2022年の外来生物法の改正により, 2023年6月からはアカミミガメ *Trachemys scripta*

が「条件付特定外来生物」として規制の対象になった. 一方で, 絶滅危惧種の保全や外来種問題の対策を実効性のあるものにするためには, 社会的な合意形成が不可欠であり, 人々の社会意識に関する理解が必要である. そこで, 本稿では社会意識の表出の一端としての新聞報道に着目し, 新聞記事において淡水性カメ類がどのような文脈で取り上げられてきたかを明らかにする.